Viator VOL.010

Merry Christmas

マリアとともに過ごす待降節

イブ・ボアベール神父

クリスマスおめでとうございます。皆様はよい待降節を過ごされましたでしょうか。少し遅くなりましたが，待降節に関する黙想をお届けします。これは南フランスの霊的グループ「神の庭師」の指導司祭ジョセフ・バビュール師が執筆したものですが，その深い祈りに強く心を動かされました。ぜひ，みなさまとこの黙想を分かちあいたいと思った次第です。

2014 年の待降節をマリアとともに過ごしますように。待ち望んでいる御方はクリスマスに生まれます。イエスがこの世を訪れるのです。それはマリアの信仰によるものであり，天使からのメッセージにマリアがこたえたことによって，さらにはマリアが神の計画を信頼し，「かくあれかし」とこたえた愛そのものによるのです。そして，今もイエスはわたしたちのもとを訪れ，そしてこれからも訪れ続けるのです。これがイエスの約束なのです。マリアとともにこの季節を祝いましょう。待降節は，イエスの誕生に心を開くよう与えられた時なのです。そして，イエスの誕生によってこそ，わたしたちは生き方を変え，イエスに仕えることができるのです。というのも，イエスはわたしたちの心の内に誕生したいと切望しているからです。

待降節とは，マリアのように，またマリアとともに信頼のうちに主を待ち望む時です。典礼暦は，心を燃え立たせるような待降節から始まります。これは，あの御方を喜びのうちに待ち望むときであり，到来する御方を，わたしたちと共にいる神（インマヌエル）を待ち望むときであり，人類の歴史に介入してこられる神を待ち望むときです。神は移りゆく時代の流れをすっかり駆け抜け，あらゆる時代の男女の苦悩や喜び，苦労や希望，さらには不安をも分かちあうのです。これが，他の宗教には認められない，キリスト教の訴える新たな価値なのです。神はまことに人類を愛され，人類の一人となり，一人一人の人間と変わらぬ人間になったのです。

わたしたちは，待降節を通じて喜びにあふれる神の子を待ち望みます。受肉し，肉体をとった主を，喜びにあふれる主を待ち望むのです。主は，汚れなき純真な子どもとして幼年期を過ごし，日々の暮らしの中で人としてさまざまな出来事を体験されました。主はわたしたちの仲間の一人となり，わたしたちに神の生命を与えるのです。

待降節にあたり，マリアを観想しようではありませんか。マリアはナザレに暮らす大勢の少女の一人であり，純真で，裕福にほど遠い暮らしをしていた人でした。深い教養を持つことなく，社会的に見れば，たいへんに貧しい家庭の出身でした。ですから，天使ガブリエルの不思議なお告げを断ることもできたはずです。また，それは不当なことでもなかったはずです。ちなみにガブリエルとは，マリアだけではなく，他の人のもとをも意のままに訪れた神の使いです。そこで，

もしガブリエルの申し出をマリアが断ったとしても，神はマリアの自由意思を尊重したことでしょう。なぜならば，わたしたちの神はわたしたちの存在を望み，まったく自由に人間を創造したからです。そのため，わたしたちは自由意思により神の申し出を断ることもできますし，心の壁を閉めることさえできるのです。マリアはみずからの自由意思によって神の御言葉に否と告げ，おとめとしての計画や目標を追い求め，ヨセフとの結婚に身を捧げることもできたでしょう。しかしマリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり，この身になりますように。」（ルカ 1，38）と答えたのです。

このようなマリアの答えは，マリアが神の意思に従い，神の愛の計画に自由に同意したことを伝えるものです。わたしたちは日々の暮らしの中でやっかいな人を追い払うために適当な返事をして，まともに取りあげないことがあります。しかし，マリアが天使の申し出を承諾したとき，マリアは天使を受け入れたふりをして，やっかいな天使を追い払おうとしたのではありません。またマリアは不安に駆られて，またなにかの罰を恐れて答えようとしたのでもありません。何も恐れはしなかったのです。天使はマリアによくわかるように理由を説明し，マリアを安心させようとしたのです。神はこのようにしてメッセージを伝えられたのです。

マリアは，何ものにも強制されることのない神の申し出を心から，受け入れました。創造主にして全能の神の計画をはっきりと，無条件で受け入れたのです。この神とは，マリアの両親のアンナとヨアキムがこれまでマリアに語り伝えてきた神であり，神はその力を使うことなく，権力をあらわにして力を示そうとされることはありません。神は，もっぱら人類を救いに導かれ，そのために自らを低くされ，わたしたちの日々の暮らしのために与えられた自由を用いられるのです。

マリアは神の計画を受け入れることによって，神が永遠の時より望んでおられた計画に加わることを熟知していました。また，主がマリアをよく知っていたために，マリアをこの計画に導き入れたこと，さらにはこの計画が人類の歴史のなかで実現するため，マリアが懐妊し準備をしたこと，マリアはこの事情をよくわかっていたのです。マリアは，自分が女の中で格別の恵みを受けた者であり，神のもとで恵みを見いだした者であることを知っていたのです。このために，マリアは神の計画に従うことを決心したのです。

しかし，このような懐妊がその頃の社会や文化では受け入れ難い結果を招くこともマリアは知っていました。他人から後ろ指を指されたり，ナザレの町で人々の噂の的になったり，石打ちの刑になるかもしれなかったのです。当時は，婚姻前に妊娠したり，婚外交渉によって懐妊した女に石打ちの刑が課されていたのですが，マリアはこのような危険に身をさらすことを引き受けたのです。とはいえ，神がわたしたちに何らかの使命を与えるとき，主はわたしたちを決して見捨てることはないともマリアは確信していたのです。

待降節の期間にあって，マリアはわたしたちに与えられた「イコン」（人間の目に見えるようになった神のかたどり）であり，マリアはわたしたちと共に御降誕を待ち望んでいるのです。マリアは希望のかたどりであり，愛と信仰のかたどりです。ですから，このような対神徳を願いながら，マリアを観想しようではありませんか。対神徳とは神に由来するもので，この徳により，主は私たちの心に日々新たに生まれるのです。神は，信頼をすることで自由にわたしたちの心に生まれるのです。待降節を利用して，御降誕祭を通じて私たちの人生には意義のあることを悟ることができますように。希望を失うことなくこのクリスマスを祝いましょう。2015 年を通じてたえずこの喜びに満たされますように。

ジョセフ・バビュール師（神の庭師）

クリスマスに私たちは何を祝うか

リノ・ベリーニ神父

実に、すべての人々に救いをもたらす神の恵みが現れました。その恵みは、わたしたちが不信心と現世的な欲望を捨てて、この世で、思慮深く、正しく、信心深く生活するように教え [ています。](テトスへの手紙 2･11-12、主の降誕・夜半のミサ第二朗読より)

サンタクロースはもとは
2～3世紀の司教様
隠れて人を助けた
彼が亡くなると、他の人たちが
彼と同じ格好をして人を助けた
墓はイタリアのバリにある

聖書には、マタイとかルカとか、イエス様の誕生について書いているところがあるんです。ベツレヘムでなどとね。しかし、クリスマスはただの誕生日ではなく、聖書の言葉で言えば、「現れ」です。つまり、人間は自分の力で神を見ることができない、想像することもできない。なのに、神が一旦輝くことになったんですね。その輝きの最初の段階がクリスマスです。

そこにいた人たちに特別な経験があったんです。天使、神の呼びかけで、この赤ちゃんがただの赤ちゃんではなく、神様から送られた救い主であることを経験したんですね。歌舞伎や能楽に、きつねが実は何々の神様だったという化身の話がありますが、そういう単純な話じゃなくて、神様が本当の人間になった。それは考えられないことです。これがキリスト教がクリスマスに祝うことです。誰も見ることができない神様が、神様であることを捨てて、貧しい人間になった。そして人間の中で一番貧しい人たちの中に入ってくるんです。人間は神様を考える時に力とか権力とか思いつくが、そうじゃなくて、神様は小さくなって貧しい人たちの中に隠れているんですね。

その神様の現れがイエスです。具体的に何が現れたかと言うと、神が人間を愛すること。神様は人間を造っただけでなく、そばにいる、成長させている、人間が自分の生活を無駄にしないように力を貸してくれている。結局、現れたのは神の慈しみです。神様が人間に対して、忍耐、愛情、優しさがあることです。(テトス 3.4 参照)

人間は時々悪いことをしたり、いい生活をしたくてもなかなかできない。自分の力ではできないんですけど、神さまが憐みを感じて、イエス様によって人間に近づいて癒す。みんな癒しのテーマに敏感ですね。みんな痛みを感じている、人との関係とか、自分が嫌いとか、人を愛したくても悪いことをしてしまうとか。そこで、テトスの上の箇所によると、イエス様が医者として来るんです。イエス様を信じる人たちは新しく生まれることが約束される。新しく生まれるとはもう一度やり直す力をもらうこと。死んでから天国でというより、今この生活の中でです。世間は「あなたはだめ」「あなたはもう希望がない」とか言うけれども、そうではなく、どなたもイエス様によって新しく生まれることができるんです。イエス様が神様の息を吹き込んで、春みたいに新しい息ができるようにしてくれる。新しい命です。そして、命はこの地上で終わるんじゃなくて、永遠の生活とつながりがあるんですね。別の言葉で言えば、あなたの生活に意味がある。今の混雑で終わるんじゃなくて、どんなことがあったとしても、意味がある。

テトスのこの箇所には、イエス様の医学が簡単な言葉で見事にまとめてあるんです。私たちの病気の原因は二つ三つぐらいだけで、そこから全部私たちの問題が出て来る。

一つは神様に対しての「不信」、信じないことです。結局、私たちは見ないんですね。神様も見ないし、相手を見るときも兄弟として見ない、自然を見るときも利己主義的。仏教も言うでしょ、

無明が人間の状態だって。だから、私たちは不安ですね。そこでイエス様は、信じない心を捨てるように力をくれるんです。それは、目を開くことです。

もう一つの私たちの問題は、「現世的な欲望」、ものに対する間違った関係です。例えば、体によくないんですけど、食べ過ぎる。食べ物に対してコントロールができないんですね。神様を考える時も、神様のことをわからないままで自分の奴隷みたいに考えてしまう。だから、自分の欲望を完成するために力を貸してと頼むんですね、こうしてください、ああしてくださいと。本当に私たちにとって大切なことがわからないから、利己主義的に神様を道具にしてしまうんですね。または相手の人間を、兄弟姉妹、愛する者ではなく、自分の奴隷にしてしまう、束縛するんですね。自然もそうです。私たちは神様が人間のために造った世界を束縛してダメージを与えるんですね。でも、イエス様は、欲望から私たちを解放する、つまり目を開くように力を貸してくれて、本当に精一杯生きることができる、本当の喜びを知る、本当の愛を味わうことができるように教えてくれるんです。

上の箇所にあるもう一つの言葉は「思慮深く」。というと、賢明です。賢明は大切なことです。賢明はいいか悪いか道を選ぶこと、正しく生きること、人と正しい関係をもつことです。みんな何か困っていることがあります。どんな道をとるべきかわからない。この人に対して、この事情に対してどうしたらいいのか、この人と結婚するべきか結婚しない方がいいのか、私たちはみんなそれぞれの形で悩んでいるんですね。そこで、イエス様は先生として教えるんです。

最後に、イエス様が教えるのは言葉だけではなくて、自分の命を尽すことで私たちに教えてくれたんです。だから、クリスマスに私たちはこの赤ちゃんの背後にすでに、イエスが送った30年間の生活とか、彼が教えた言葉とか、そして十字架の上で私たちのために命をすべて尽くしたことを見ます。馬小屋の赤ちゃんの姿をよく見てください。手を広げているんですね。十字架の形ですね。これは私の勝手な話ではなくて、ルカがイエス様の誕生を書くとき、不思議なことに、イエスが死んで十字架から下ろされた時と同じ言葉を使うんです。「布に包んで飼い葉桶に寝かせた」(2·7)「亜麻布に包み … 墓の中に納めた」(23·53)。つまりルカは、誕生日の話をするんですけど、イエスのすべての話をしたい、イースターの話をしたいんですね。結局、クリスマスはイースターです。イースターだから、わかるために信仰の恵みが要るし、その恵みを素直に受け入れる心も必要です。

神学院での日々

菅原　友明

4 月から、東京の神学院で助祭としての養成を受けさせていただいております。神学院では、24 名の神学生が養成者と共に生活しています。一日中様々な人間関係にさらされる共同生活は煩わしい面もありますが、だからこそ、そこに豊かさもあるのだなと感じています。

生活の基盤は祈りで、ミサ、念禱、時課の祈りと、一日に何度も聖堂に集います。月に一度は「静修」があり、司教様の講話を聞き、沈黙の時間を持ちます。また、定期的に指導司祭との面談があり、自分の霊的状況を話し合います。このように「いつも霊的に主と共にある」ことができるような配慮がなされています。

私が編入した「助祭コース」では、刑務所、留置所、学校、福祉施設、NPO 法人、様々な支援団体、他教団、等々、多くの施設を訪問させていただきました。それぞれの場で、任務に情熱を持って取り組む方々、服役中の方々、留置されている方々、依存症からの回復の道を歩んでおられる方々等と出会い、形をとったキリストの愛を実感させられています。

授業では、教会事務手続き、秘跡の執行方法、小教区の運営方法、聖書クラスの進め方、司祭自身の心のケアなど、司祭になってすぐに必要となる多くのことを学びます。週末は司牧実習があり、私は土日を町田教会で過ごし、神父様や信者の皆様との交わりの中で多くのことを学ばせていただいております。

神学院に来て、同じ道を歩む多くの仲間と出会えたことは本当に大きな恵みでした。それぞれの人生の中で、主の呼ぶ声を聞いてここに集い、それぞれの弱さや欠点を抱えながらも、キリストと教会に人生を捧げようとしている仲間の姿は、私にとって大きな刺激となり、信仰を見つめ直す機会であり続けています。私の「同級生」となった助祭の方は、今年は 10 名と多く、そのうちの 1 人、厳律シトー会の横内弘助祭が、11 月 4 日に北海道当別のトラピスト修道院で一足早く司祭叙階を受けました。

神学院での貴重な 1 年間も、あとわずかとなりましたが、最後まで少しでも多くのことを学び、司祭叙階への準備としてゆきたく思っておりますので、どうぞお祈りください。北白川教会の皆様には 12 年間にわたり本当にお世話になりましたこと、心より感謝いたしております。皆様が主の恵みに満ちた素晴らしいクリスマスの時をお過ごしになりますようにお祈り申し上げます。

日本とカナダで生活して

J.K.

これは、日本とカナダでの経験を通じて生活し、働き、信仰を深めた私たち家族のお話です（写真 1）。国際的な家族、私たちのお話です。

私、J.K はカナダアルバータ州のエドモントンのカナダ人四世のカトリックの家庭で生まれました。出生後すぐに洗礼を受けました。妻の H は静岡県浜松市で生まれ、修道女である私の叔母の影響でカトリック信仰に非常に興味を持つようになりました。彼女は、2011 年 4 月 23 日にエドモントンのセントトマスモア教会で洗礼を受けました。1988 年 9 月 2 日に一人息子、E を授かり、彼は現在カナダで生活し、仕事をしています。

1982 年、私は静岡県浜松市の友人を訪問するために日本に来ました。私と彼女は、英語教師の会の翌年に出会い、2 年後、私たちは結婚することを決めました。まず私は、結婚生活に向け仕事を見つけるため、カナダに戻ることにしました。数か月後、彼女は極寒の 2 月のエドモン

トンに到着しました。なんと気温 -25℃。私たちは、アルバータ大学のキャンパス内にあるセントジョセフ礼拝堂で 1985 年 5 月 4 日に結婚式を挙げました。

私は幸運にもカナダ政府と仕事をすることになり、仕事のために数回の日本派遣を命じられました。1983 から 85 年の間、私と妻は東京板橋区に住みました。つまり、カナダに帰国する前の 1 年間の結婚生活は日本だったのです。この派遣は私たちを日本の生活に引き戻す一連の仕事の始まりになります。息子 E を授かった後、1989 年から 2005 年の間、私たち家族は日本とカナダを 3 回以上往復しました。私は名古屋にあるカナダ領事館の領事の任務を終え、2005 年にカナダに戻りました。私は 26 年間カナダ政府で勤務し、2012 年に退職いたしました。次に何をすべきか考えていたところ、カナダ在住の日本人教授の友人に博士研究者を勧められ、これは良いアイデアだと思いました。その後私は、京都大学大学院エネルギー研究所に採用され、2013 年 9 月に京都に移りました。

写真 1 家族写真

日本とカナダの間で移住を繰り返した結果、私たちの生活は非常に広がりを持ち、幸運にも東京、名古屋、浜松、京都で多くの友人と出会うことができました。東京にいる間、私たちの息子はカナダから来たカトリックのブラザーによって 1950 年代に設立、運営されているセント・メリーズ・インターナショナル・スクールに通いました。東京にいる間、私たちはいくつかの教会に行きました。

2013 年 9 月に京都に来たとき、私たちが知っている教会は一つもありませんでした。河原町教会に何度か通っていたのですが、ある日出会ったたかこさんに北白川ヴィアトール教会についてのことを聞きました。早速、次の日曜日に行こうと決め、昨年 10 月以来私たちはここに来ているというわけです。私たちが参加し始めた頃すぐに私は見覚えのある男性が私の前に座っていることに気づきました。私はミサの後、彼のところに行って驚きました。なんと、ワシントン DC から来られていたトーマス・ライアン神父様だったではありませんか。私たちが日本に行く前にエドモントンで黙想会に参加した時に、ライアン神父様の説教や宗教のわけ隔てない仕事ぶりに非常に感銘を受けていました。ライアン神父様は多くの本を出版しており、北米全体における印象深い活動を通じてよく知られています。彼は韓国ソウルで行われた世界教会評議会に出席し、京都に寄った際にヴィアトール修道会で滞在されました。私たちはヴィアトール教会でライアン神父様に会ったとき、聖霊の恵みによって導かれていることを確信しました。私たちはライアン神父様を夕食のために自宅に招待し、11 月の京都をご案内しました（写真 2）。私たちは、京都で一緒に素晴らしい数日間を過ごすことができ、神とヴィアトール北白川教会の恵みに感謝いたします。

写真 2 ライアン神父様と京都観光

私たちは、多くの人々が深く教会に関与し、非常に家庭的で暖かい雰囲気をここヴィアトール教会に感じます。それは、ボアベール神父様、ベリーニ神父様、ラバディ神父様、ベルナルドブラザー様など私たちが出会うことができた素晴らしい人々によるのだと思います。私たちはすでに教会を通して多くの友人と出会いました。妻はヴィアトール教会のコーラスで歌い、京都国際交流会館で外国の方に日本語を教えるボランティアをしております。私たちはヴィアトール教会に出会えたことに祝福を感じております。

役員退任挨拶

S.T

新米で、教会の事が何もわからないまま、お引き受けし、あっと言う間の二年間でした。微力ながらお役をさせて頂く中で、いろいろと至らない事があり、ご迷惑をおかけしました。でも皆様の温かい支えのおかげで、私自身教会の事をもっと知ることが出来、多くの方々と関わる機会を得られた事に感謝しています。残念ながら後半は、仕事が忙しくなり充分にお役を果たせませんでした。今後又次期の方々に協力して、皆様とともに歩ませて頂きたいと思います。

T.A.

この２年間皆様に支えられてなんとかゴールにたどり着くことができました。気配りが行き届かず何事も直前までバタバタしてしまい、多くの方にご迷惑をおかけしてしまいました。週末は子供達の面倒を見ながらで肉体的にも辛かったですが、多くの方と交わることができたのは大きな恵みでした。皆さん、ありがとうございました。

2014 年　部会活動報告

【典礼部】

今年１年、聖霊のお力により皆様方のご協力が得られ、ミサが滞りなく行えましたことに感謝いたします。本当にありがとうございました。途中で M 様から引継ぎましたが、不慣れなことから皆さまにご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げると共に、折に触れご指摘、ご意見を頂きありがとうございました。

典礼部からいくつかお願いがあります。皆さまのご理解のおかげをもちました朗読、案内係の奉仕者も少しずつ増えてきており、うれしい限りです。でも、まだ一部の方への負担が大きいのが現状です。既にご協力いただいておられる方々にお話をお聞きいただければ、朗読、案内係は誰にでもできることがわかっていただけると思います。ご希望される方はＡさん（朗読）、Ｍさん（案内係）、S に是非お声をかけてください。又、御ミサ後のビデオ上映も始めましたが、それをお手伝いいただける方は下地までご連絡ください。

Starting from the coming month of January, we are pleased to announce that we will do the Mass Readings and a couple of the General Intercessions in languages other than Japanese (in addition to Japanese) at least once a month. These readings can be found in the Sunday Liturgy pamphlet that is available on Sundays and special feast days. We would be grateful for your participation. Please contact Mr. Shimoji if you would like to volunteer to do these readings.

今年の後半から毎日曜日のミサでの共同祈願の際に、「聖書と典礼」に書かれた祈祷文とは別北白川の共同体のために祈りを追加しております。又、Y 様のご協力のおかげでご聖堂への入り口と掲示板に聖書・お祈りなどから引用したメッセージの掲示も行っております。これらについても皆様方からの投稿を受け付けておりますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。Ｈさん、S に声をかけてください。尚、申し出が多い場合は、その中から選ばせて頂いておりますので、その点ご理解いただきますと共に引き続きご協力の程よろしくお願いいたします。

ところで、ちょっと早めに教会に来て頂き、「聖書と典礼」を予習し、ごミサ中の朗読の際は「聖書と典礼」から目を離して、朗読の方、神父様の声に耳を傾けてみませんか。

まえもって聖書と典礼に目を通したい方は、事務所に一か月分が準備されてありますので、増

田様までお申し出ください。ウェブサイトからも入手できますので霊性センター「せせらぎ」（URL：http://seseragi-sc.jp/：“日曜日のみことば”をご覧ください。毎日の朗読、お祈りもご覧いただけます。

第一日曜日にミサ後に開いております典礼部の集まりはどなたでも参加できますので、様子見で結構ですので是非皆様のお出でをお待ちしております。「全員の参加のよる典礼」の実現に向けて今後も皆様がたのご協力をよろしくお願いいたします。（K.S.）

【財務部】

年間を通して各種献金を集計、管理、運用、毎月の収支内容を評議会へ報告、三月末決算を修道会へ報告、半年献金を教区へ報告、予算作成、12 月末決算報告、教区へ決算報告、その他北白川教会の財務全般に関係する事を行いました。　（H.S.）

【教育部】

教育部は小学生の日曜学校を中心とした活動を行いました。ごミサ後の日曜学校を基本に活動しており、その日の福音書、また典礼歴にそったお話をしています。

ごミサでは、年に 2 回、5 月の母と子のミサ、11 月の七五三ミサで、子どもの成長と家族についてお祈りするミサを、教会員の皆様の協力のもと行っています。このごミサの中で子どもたちが、聖書朗読などの役割を担うことがとてもよい経験になっています。また初聖体クラスは、（原則として）小学 1 年生次から約 1 年間をかけて、ゆっくりと準備をすすめており、2 年生の「聖体の祝日」に初聖体をむかえます。初聖体後は、少しでもミサが子どもさん自身の生活に定着していくように、侍者や奉納の奉仕をお願いしています。日頃の感謝の気持ちを込めて、神父様やブラザーへのバースディ、クリスマスカード、敬老の日のパーティのお箸おき、バザー参加など、教会の季節の活動にも参加しています。春のご復活祭の前後、ご降誕節には、お楽しみ会、クリスマス会を行っています。食事を一緒にして楽しみますが、年に 2 回神父様が子どもたちにもきちんとしたゆるしの秘跡を授けて下さる貴重な機会でもあります。

洛北ブロックの教育部の活動も盛んで、1 月の新年おもちつき会、ブロックでの初聖体や堅信にむけての勉強会、保護者交流会、宿泊を伴う夏の教会学校などを通して、ブロック内の子どもたちや保護者間の交流が図られています。

来年度も教会の皆様があたたかく子どもたちの成長を見守りお祈りくださいますようお願いいたします。　（Y.M.）